

特集

前森高原の物語は続く。

人がいるから、

この場所は続いていく—。

多くの人が訪れた前森高原—。

令和8年4月から、この場所は町営施設として新たなスタートを切りました。指定管理による運営が終了し、規模を縮小しての再出発。かつての姿を知る人の中には、「前森高原はこれからどうなるのだろう」と感じた方もいるかもしれません。

しかし今も、この場所には変わらず人の姿があります。馬を世話する人。訪れた人を迎える人。蕎麦を打つ人。土に向き合う人。自然の中で子どもたちと過ごす人。華やかではないけれど、確かに続いている日々があります。

この特集では、前森高原に流れる時間と、そこに関わる人たちの営みを通して、“前森高原の今”とその場所に秘められた可能性を見つめます。

SNSで
今日も風景を届ける



前森高原 宿泊・総合案内担当
おおば しの
大場 詩乃さん（26歳）

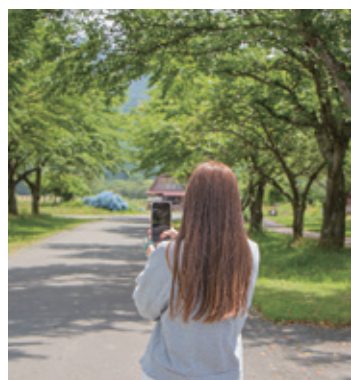
前森高原の日常や、馬たちの様子、さらにはイベント情報などをInstagramで情報発信。ふるさとの魅力を多くの人に届けるため、日々写真と言葉を届けている。

この景色を多くの人に見てもらいたい。

前森高原の風景を多くの人に届けるため、若い世代から年配の方まで、幅広い年代に親しんでもらえるよう心掛けています。

アウトドアの観光地では、雨の日になると来場者が少なくなり、その日の前森高原の魅力を感じてもらう機会も少なくなります。しかし、私はどんな天気の日でも、その時にしか見ることのできない「ありのままの前森高原」を好きになってもらいたいと思い、その瞬間の風景を発信しています。

もっと多くの人に前森高原の魅力を知ってもらえるよう、これからは四季折々の風景を伝えるリール動画にも力を入れていきたいと思っています。これから迎える夏は撮影できる場面も多く、今から動画づくりを楽しみにしています。



前森高原の  を届けています。

- ✓ フォロワー5,000人を突破！
- ✓ イベント・出店情報も随時発信
- ✓ 馬たちの日常も紹介



風景を 守り続ける人。

今日も明日来る人たちの

ために風景を守りたい。

馬が歩く。山並みは変わらない。

風に揺れる草も、遠くに聞こえる鳥の声も、

20年前と変わらない。

その当たり前の風景は、誰かが毎日守っている。

馬と向き合う毎日や、風景を伝える積み重ねが、

前森高原の今日を支えている。

馬たちが元気でいてくれる。それこそが前森高原の風景。



馬がいる風景は、

前森高原そのもの。



最上町は古くから馬の産地として知られてきた。前森高原にも開設当初から馬がいて、人々はこの景色を当たり前のように眺めてきた。町営となった今も、その景色を変えたくない。

馬がいる風景は、
前森高原の風景そのもの。

乗馬担当というと、お客様を馬に乗せる仕事を思い浮かべる人が多いかもしれない。しかし高橋さんの一日は、その準備の時間に多くを費やしている。馬の体調を確認し、水を与え、餌を食べさせ、ブラッシングをする。運動させ、休ませる。人と同じように、一頭一頭の体調は毎日違う。「馬は生き物だから、毎日同じということはありませんね。」お客様が安心して乗馬を楽しめるのは、そんな何気ない積み重ねがあるからだ。

馬に乗せるより、
馬と暮らす時間の方が長い。

「前森高原を楽しみに来てくれる人には、昔と変わらない景色を見てもらいたい。」

馬がいるからこそ、この場所は前森高原らしくある。高橋さんはそう信じている。

もっと身近な、
前森高原へ。

約20年前は、町民が気軽に乗馬を楽しむに訪れる場所だった。町営となった今、高橋さんが願うのは、観光客だけでなく町民にとっても身近な存在になること。「子どもたちも、大人も、ふらっと遊びに来られる場所になってほしいですね。」人が集まり、笑顔が生まれる場所であり続けること。それもまた、この風景を守ることに繋がっている。

この場所があることが、
私の生きがい。

最後に高橋さんに尋ねた。「前森高原は、ご自身にとってどんな場所ですか。」少し考えたあと、高橋さんは静かに答えた。

「前森高原に携わる多くの方々にとって、ここがあると生きがいだと思います。明日も、そのまた次の日も、前森高原の風景を守り続けてみたい。」

高橋さんの言葉を聞いたとき、風景は自然だけでできているものではないと気付かされた。馬を世話する人がいて、その姿を見守る人がいて、訪れる人がいる。人が関わり続けることで、この風景は今日も前森高原であり続ける。



前森高原 乗馬担当
たかはし ゆきひろ
高橋 幸宏さん（55歳）



工房のすぐそばを流れる清らかな水。ものづくりは、この自然の恵みから始まる。

前森高原のそば屋と陶芸工房。

この場所で、

この場所だから、生まれる器。

カムロ窯では、この日も夫婦で器を仕上げる作業が続いていた。前森高原で陶芸を始めた理由を宗太郎さんに尋ねると、「ここには、もともと陶芸を営んでいた場所が残っていたから」と話す。

建物にもう一度手を入れ、この場所を生かしたいと思ったこと。そして、最上町の最上流部を流れる澄んだ水も魅力に感じた。

「水で土の粘りが変わるんです。」

自分たちが思い描く器づくりによりそう存在だった。ここで生まれるのは、飾るための作品ではない。毎日の食卓で使われ、人の暮らしに寄り添う器。

工房では、二人が自然と言葉を交わしながら作業を進めていく。器を並べる、窯を見守る、道具を手渡す、特別な合図はない。

長い時間を共に過ごしてきたからこそ生まれる呼吸が、そこにはあった。

作品として競う器ではなく、毎日の暮らしの中で何

二人で育てる、静かな時間。

「器には、作った人の場所や環境が出ると思うんです。」

そう話す宗太郎さんの言葉が印象に残った。山に囲まれ、風が吹き抜け、水が流れる前森高原。ゆつくりと時間が流れるこの場所です。土に向き合うからこそ、焦らず、自分たちのペースでものづくりができる。その穏やかな時間は、器の表情にも表れるという。

「やわらかい器になると思うんです。」

手に取った人が、食卓を囲み、少しでも気持ちよく和らぐように。器には、前森高原の静けさと優しさがそっと映し出されていた。



器には、この場所が映る。

しに寄り添う「生きた器」。この自然の中で生まれた器だからこそ、暮らしの中にもそっと溶け込んでほしいと願っている。

帰る場所になった前森高原。

宮城県と青森県から最上町へ移り住み、地域おこし協力隊として暮らし始めた二人。前森高原を選んだ理由は「陶芸ができる場所」だったから。

しかし、暮らしを重ねるうちに、その見方は少しずつ変わっていった。「時代が変わっても、ここには変わらない自然がある。」山が守り続けてきた景色。澄んだ水と静かな空気。その一つひとつが、ものづくりにだけでなく、自分たちの暮らしを支えてくれていることに気付いたという。

「前森高原は、私たちの帰る場所なんです。」

そう話す二人の穏やかな笑顔からは、この場所で育んできた暮らしへの愛着が自然と伝わってきた。

景色だけじゃない、食べ物だけでもない。

人を迎え続ける。

この場所には、人がいるからまた来たくなる。



創業以来、一日も欠かさず記録し続けた

「蕎麦は毎日違う。」

気温、湿度、天気、少し条件が変わるだけで、同じようには打てない。

だから秋葉さんは、創業以来二十五年以上、毎日の天気や出来栄をカレンダーに書き続けている。積み重なった二十五冊のカレンダーは、秋葉さんにとって「宝物」。昨日より少しでも良い一枚を打つため、今日も過去の自分と向き合う。

蕎麦と一緒に味わう。

今日も、前森で人を迎える。大きな鍋から立ち上る湯気。石臼で挽いた最上早生の香り。店の窓の向こうには、どこまでも広がる草原がある。

「ここで食べるから、おいしいですよ。」

そう話すのは、前森高原でそば処「はらっ葉」を夫婦で営む秋葉悦夫さん。秋葉さんが大切にしているのは、蕎麦だけではない。前森高原の風、水、景色、そのすべてを一緒に味わってもらおうことだ。

自然も一緒に食べてもらいたい

「そばを打つ水がいいから、おいしい蕎麦になるんです。」そう言いながら窓の外へ目を向ける。草原を渡る風を感じながら蕎麦を食べる時間まで含めて、この店の味だという。県外から訪れるお客さんは、「北海道みたいだね」と驚く。「こんな景色はなかなかいでしょ。自然を感じて、幸せな気持ちで帰ってもらえたら、それが一番うれしいですね。」

忙しいのあとに流れる時間

お店を営業しているとき、一番好きな時間はいつですか。そう尋ねると、少し笑って答えた。「蕎麦を出している時と、終わった後かな。」慌ただしく過ぎる昼の営業。そのあと店の外へ出ると、目の前には静かな草原が広がる。

「その景色を見るとね、時間がゆっくり流れるんですよ。」

この景色を、これからも。

「毎日見ている飽きませんか。」そんな質問にも、秋葉さんは迷わなかった。

「飽きないよ。生まれ育った場所だから。体力が続く限り、この場所で蕎麦を打ち続けたいし、お客さんと同じ景色を眺めながら、人を迎え続けたい。」その言葉には、二十六年間変わらない、そこで人を迎え続ける覚悟がにじんでいた。

訪れた人たちが、「またこの景色を見に来たい」と思うさせてくれるのは、蕎麦だけではなく、秋葉さんという人がいるからなのかもしれない。



前森高原の自然は、自由を教えてくれる

おおば みつろう
大場 満郎さん（73歳）

アースアカデミー・大場満郎冒険学校

子どもたちが自然の中で笑顔になれる。
それが私の願いです。

6年前から温暖化に備えてキャッサバを栽培。

自然を通して子どもたちに伝えたいことは、技術でも知識でもない。
自然と向き合って風を感じたり、土に触れたりすること。

故郷の大切さを自然から教わる

前森高原の草原を吹き抜ける風。季節ごとに表情を変える森。空いっぱい広がる青空。この場所で大場満郎さんが子どもたちと向き合い続けている理由は、自然の中だからこそ得られる時間があると信じているからだ。

世界中の極地を歩き、自然と向き合ってきた大場さんが、活動の拠点として選んだのは、生まれ育った最上町・前森高原だった。

「北極でも、生きるか死ぬかという場面です。思ったのは、ふるさとに帰りたいということでした。」

極限の自然の中で改めて気付いた故郷の存在。その思いが、今の活動につながっている。

本来、自然とは自由なもの

大場さんは「本来、自然とは自由なものです」と語る。今の社会では、子どもたちは学校や家庭の中で、多くの約束や決まりを守りながら生活している。やりたいことがあっても、自分の気持ちを抑えたり、周りに合わせたりする場面も少なく

ない。

しかし、自然の中では少し違う。やってみたいと思っただけに挑戦する。気になったものに近づいてみる。風を感じ、土に触れ、水の冷たさを知る。そんな素直な気持ちを大切にしながら自然と関わるのが、「自然を感じる」とであり、「自然を学ぶこと」なのだ。大場さんは考えている。

だから、大場さんが前森高原で主宰するワイルドエドベンチャー・スクールは、何かを教え込む場所ではない。自然の中で、子どもたちが自由になれる時間をつくる場所なのである。

見守ることも、大切な役割。

「私は、子どもたちがどんなふうに変わるかまでは見ていません。」

そう話す大場さんの言葉は意外だった。活動の中で最も大切にしているのは、子どもたちが楽しく過ごせること。そして、けがなく活動できるように見届けることだという。子どもたちがどのように成長したのか。それは家に帰ってから保護者が感じることはないか。

だからこそ、大場さんは子どもたちの行動を必要以上に導こうとはしない。自然の中で自由に過ごし、自分の感覚で自然と向き合う。その時間そのものを大切にしている。

私たちは、自然に生かされている。

前森高原は四季がはっきりしている。春には芽吹き、夏には草原が広がり、秋には木々が色づき、冬には一面の雪景色へと変わる。自然はいつも正直だ。

人の都合で季節が変わることはない。雨も風も雪も、あるがままの姿でそこにあり続ける。だから大場さんは言う。

「私たちは自然から生かされているんです。」

人は自然の中で食べ、暮らしを営み、水をいた



だき、命をつないできた。便利になった今は、その当たり前を忘れかけているのではないか。だからこそ子どもたちには、自然の中へ入ってほしい。土に触れ、その温かさを感じる。風を感じること。雨に濡れること。草の匂いを知ること。そうした体験を重ねることで、人は自然の一部として生きていくことを、体で感じるができる。

大場さんが自然と向き合うために大切にしている言葉がある。

それは、「畏れ、謙虚、感謝」。

自然を畏れ、自然の前では謙虚であり、生かされていることへ感謝する。その気持ちで、人と自然をつないでいく。大場さんは、その思いを前森高原で子どもたちへ伝え続けている。

「前森高原は、私にとって自由な場所です。」

その言葉には、この場所だからこそ伝えられるものがあるという確信が込められていた。広い草原があり、四季があり、ありのままの自然が残る前森高原。ここには、子どもたちが自然と向き合い、自分自身と向き合える時間が流れている。その風景こそが、前森高原の可能性なのかもしれない。

「前森高原には、人を育てる自然がある。」

この場所には、自然を敬い、自然から学び、自然とともに生きる時間が流れている。

大場さんは、今日も前森高原で子どもたちを迎える。

Profile 冒険家 大場 満郎（おおば みつろう）

最上町出身。農業に携わる傍ら、「人間は人間らしく、好きなことをして生きる」という思いを胸に世界へ飛び出し、数々の冒険へ挑戦した。南米アマゾン川流域約6,000kmのいかだによる冒険を経て、世界初となる北極海単独徒歩横断（距離1,730km）を成し遂げるなど、極地冒険家として国内外で活躍。その後も南極大陸横断（距離3,829km）など数々の挑戦を重ね、「自然と向き合う冒険家」として知られる存在となった。2001年には前森高原に「アースアカデミー・大場満郎冒険学校」を開校。現在はワイルドエドベンチャー・スクールを通じて、自然体験活動に力を注いでいる。自然の中で遊び、感じ、考える時間を大切にしながら、多くの子どもたちと向き合い続けている。

【主な歩み】 1988年 アマゾン川いかだ冒険／1997年 世界初・北極海単独徒歩横断（横断距離1,730km）
2001年 前森高原に冒険学校開校



高校生広報記者、 町を歩く。

新庄東高校2年生の藤原奏穂さんがインターンシップで広報の仕事を経験。
カメラを手に町を歩き、最上町の魅力を探しました。(以下の写真は藤原さん撮影)



01 馬と人の距離

同じ高校からインターンシップで訪れた生徒を撮影。広報写真として伝わりやすいよう、人の動きや表情に注目して撮影しました。

02 広がる景色

天気良かったため、山と空を主役に最上町の自然の豊かさを表現しました。



03 視点を変えて

水面近くからレンズをのぞかず撮ること、川の迫力や透明感を表現してみました。

04 看板の向こうへ

緑に囲まれた並木道と看板が印象的だったためシャッターを切りました。

05 子どもたちとともに

同じくインターンシップに来ていた佐藤さん(富沢)とサッカーを楽しむ園児たち。

カメラを通して見ると、いつもの景色が少し違って見えました。

青空の下、草原だけが広がるあの空間で。

この場所の魅力は、施設や設備だけではない。
人が関わり続けてきたからこそ、ここには特別な時間が流れている。
これからも、まちの財産である前森高原を、次の世代へしっかりとつないでいきたい。

前森高原の歩みを振り返ってみると、原風景だけだった時代から観光地としての潜在的な魅力を発揮し、さまざまな挑戦が重ねられてきた場所だったと思います。
そして、最上町を代表する観光地としての絶頂期を経て、現在に至っています。かつて、県を挙げての大イベントだった「やまがた林間学校」では、毎年主会場となっていたことが思い出されます。
青年団が有名歌手を招いた野外コンサートを開催したこともあり、大きな禿岳山麓を巡る乗馬トレッキングが話題となり、首都圏からも多くのお客様が訪れました。冬のスノーモービルランドも、一面の雪原と林間コースを思う存分楽しめるエリアとして、他にはない魅力を誇っていました。
さらに、数々のイベントや旅行ツアーが開催され、映画撮影



最上町役場 商工観光課
観光振興専門員 伊藤 和久さん

この場所の原点に、立ち戻る。

にも協力するなど、テレビや新聞、旅行雑誌の取材対応に追われた日々を思い出します。
これらの成功は、決して行政主導によるものではありません。前森高原を舞台に何かをやってみようという町内外の若者たちや、熱意ある事業者の皆さんが挑戦を続けてきた成果だと思っています。決して一人の仕掛け人がいたわけではありません。関わった人たち一人ひとりの思いが、この場所に変化をもたらしてきたのです。
あらためて、観光振興とは、その土地を愛する人が主体となっていてこそ、本当の魅力が発揮されるものなのだと感じます。今、前森高原はもう一度原点に立ち返り、その価値を見つめ直す時なのでしょう。
お客様が前森高原に求めているものは、次から次へと与えられるアクティビティではなく、青空の下、草原だけが広がるあの空間で、心の深呼吸をする時間なのではないかと思っています。その特別な空間の中で、食と体験、滞在、そして芸術が生まれてきました。
スマートフォンからシャワーのように情報を浴びる現代だからこそ、ゆっくりと時間が過ぎていく場所の価値は、ますます大きくなっているのではないのでしょうか。
そのような視点で考えると、前森高原には決して途絶えることのない魅力が確かにあると、私は信じてやみません。

前森高原の物語は、続く。

前森高原を守る人、人を迎える人、
自然を伝える人、この場所を思う人がいる。
その思いが、前森高原の物語を作っている。

profile

藤原奏穂さん(向町)

新庄東高校(2年生)

6月17日から19日にかけて、役場総務企画課まちづくり推進室に、インターンシップとして来てくれました！また、このページは藤原さんと共に撮影・編集しました！

インターンシップを終えて

今回のインターンシップでは、まちづくり推進室の広報業務を体験し、地域活性化を担う仕事の重要性を深く学びました。特に印象深かったのは、本格的なカメラを用いた撮影です。一眼レフを手にするのは初めての経験でしたが、職員の方に光の捉え方や構図の工夫を丁寧に教えていただき、一枚の写真が地域の魅力を伝える力になることを実感しました。

ファインダー越しに町の風景と向き合う中で、その場所が持つ物語を伝える面白さにも気づくことができました。このような経験から学んだ、地域と関わる仕事への思いを大切に、これからの将来や職業の選択にしっかりと活かしていきたいと思います。